

# 西陣織産業における在日朝鮮人 —労働と民族的アイデンティティを中心に—

安田昌史

## I. はじめに

京都の在日朝鮮人<sup>1</sup>が従事してきた典型的な産業として、西陣織や京友禅などの繊維産業を挙げることができる。特に西陣織産業では着物生地や帯を織る様々な工程に多くの在日朝鮮人が経営者・労働者として就労してきた。しかし、京都府や京都市が編纂した西陣織の歴史に関する資料や京都の繊維産業に関する研究では、日本人の経営者・労働者について論じられることはあっても、在日朝鮮人について言及されることは、ほとんどなかった。かつて飯沼二郎は日本社会に実際に存在しているにもかかわらず、日本人にとって在日朝鮮人は「見えない人<sup>2</sup>」達であると形容した。西陣織産業においても在日朝鮮人は存在したにもかかわらず、「西陣織＝伝統産業」という認識によって、一般の日本社会以上に在日朝鮮人は見えない人達として扱われてきたといえるだろう。そこで本稿では西陣織産業に従事した在日朝鮮人の経営者・労働者の労働と、その労働を通じて現れる彼らの民族的アイデンティティを個人の記録などの資料やインタビューでの語りを基に考察する。

まず西陣織産業における在日朝鮮人の労働の各局面として、戦前の朝鮮人がどのように京都へ訪れ、どのように西陣織産業で就労するようになったのか、また西陣織産業の中で彼らが、いかに技能を習得するのかを見ていく。そして西陣織産業の盛衰を受け、在日朝鮮人は経営者・労働者としてどのように対応したのかを考察する。筆者がこれまで研究してきた京友禅産業と西陣織産業との比較を通じて、各産業における在日朝鮮人と日本人との関係について論じる。

また西陣織産業で働く中で、在日朝鮮人が、どのような民族的アイデンティティを持ったのかを見ていく。西陣織産業での労働を通じ民族的なアイデンティティがどのように表出し、民族的な活動へつながっていくのか、民族的アイデンティティがどのように形成されていくのかを考察する。そして西陣織産業に携わった在日朝鮮人が民族的な意識を持ちながらも、この産業で就労することに対して、どのような思いを持ったのかを論じる。

本稿では、これらを西陣織産業に従事した7人の事例を通して論じる。これら

事例だけで西陣織産業に従事した在日朝鮮人の全てが、そうであったと普遍化することはできないが、筆者は彼らの事例をみることで、同産業に従事する在日朝鮮人の生活や意識、そして日本人との関係の一部を知ることが可能になると考える。また、これら記録や語りには歴史的事実と食い違う部分が存在するかもしれない。それらが事実かどうかも重要であるが、個人の記録やインタビューにおいて、彼らがなぜそう語るのかを文脈の中で整理し解釈することが、西陣織産業における在日朝鮮人の労働や生活、また彼等の民族的アイデンティティを理解する上で重要であると筆者は考え、本稿の事例の資料として用いる。

## 1. 先行研究の検討

まず戦前の京都の朝鮮人に関する先行研究を整理していく。河明生は渡日初期の朝鮮人は不良住宅地域近隣の中小零細工場へ「自己申し込み」を行い、先駆的就労者となったと指摘している。そして彼らの就いた産業は、メリヤス工業、西陣織工業、友禅染工業であったという<sup>3</sup>。また高野昭雄は京都市に流入した朝鮮人は韓国併合前後から西陣織産業に従事しているのを確認しており、1920年頃の京都市在住の朝鮮人の中心地は西陣であったと指摘している<sup>4</sup>。

続いて戦後の西陣織産業で就労した在日朝鮮人に関する先行研究を整理する。韓載香は1945年以降に京都の在日朝鮮人の経営者が京都の繊維産業で、いかに彼らのコミュニティを利用し資本を蓄積させたのかを論じている<sup>5</sup>。しかし韓載香の研究では調査対象が在日朝鮮人の経営者であり、労働者として同産業に就労していた者については不明な部分が多い。また李洙任はオーラル・ヒストリーの手法で西陣織産業に携わった在日朝鮮人のエスニシティについて考察している<sup>6</sup>。李は労働者や零細な経営者の生活を詳細に描こうとしているが、ルポルタージュ的な性格が強く、具体的な結論には至っていない。そして高野昭雄は各種統計資料を利用し、1950年代までの西陣地域における朝鮮人の居住地の地理的分布を論じている<sup>7</sup>。しかし高野の研究では1960年代から現在まで西陣織産業に従事した在日朝鮮人について扱われていない。

そこで本稿では京都の西陣織産業における在日朝鮮人について、この産業に従事した7人の事例を通して考察する。具体的にはこの7人に関する記録や本人や関係者へのインタビューで得られた語り<sup>8</sup>を用いて、彼らの西陣織産業での労働とその中で現れる民族的アイデンティティを論じる。

## 2. 西陣織産業の概要

西陣織とは狭義には京都の西陣地域で作られる織物であり、京都の「先染め」織物の総称である。京都には5世紀頃から織物の技術があったと考えられるが、

15世紀の室町時代から「西陣織」として発展した。江戸時代に町人文化が台頭すると西陣織は京都の富裕町人の支持を受け、さらに発展することになった。そして明治初期、京都府は政府の殖産興業政策を背景として、従来から存在した産業を近代化させる方策をとった。その中心的産業になるのが「先染め」の西陣織と「後染め」の京友禅であった。

西陣織産業では1872年にフランスからジャガード織機の導入により、織工程の機械化がなされた。また各生産工程の分業化(図.1 参照)によって、製品の大量生産が可能になった。そして大正から昭和初期にかけて高級絹織物の大衆化が進み、西陣織産業でも手織技術の高度化や図案の洗練が行われた<sup>9</sup>。

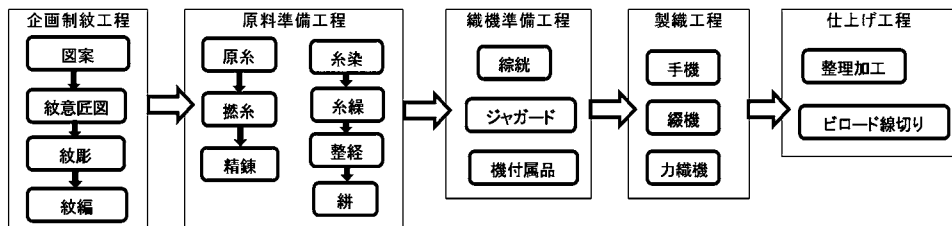


図. 1 西陣織製品生産の工程<sup>10</sup>

しかし第二次世界大戦中、高級贅沢工芸品を生産する西陣織産業は休機や休業により壊滅的な打撃を受け、1945年の敗戦当時は少数の製造業者が細々と生産を続ける状況であった。1950年代後半からの高度経済成長期、生活の安定や消費水準の向上や高級着物製品の需要増大により西陣織産業は復活する<sup>11</sup>。

1960年代まで同産業は活況を呈するが、同時期に日本の服装文化の変化が起こり、着物に対する需要は相対的に低くなる。また1973年の石油危機により生産に必要な原材料価格が高騰し、続くバブル経済の崩壊や消費不況により、西陣織産業の生産量は急激に減少する。西陣織産業の出荷額はピークの1983年と比べ2000年は18.7%となっている<sup>12</sup>。

### 3. 資料とインタビューの整理

ここでは、事例として扱う西陣織産業に従事した人々を簡単に紹介する。

- ① C1氏(1911～2000)…在日朝鮮人1世、男性。元西陣織製品の製造業(織屋)・卸売・流通業者。孫 C3氏の卒業論文(1987年執筆「C3氏卒業論文」)を参考。2013年から2014年、息子 C2氏へのインタビューを実施。
- ② O1氏(1919～2010)…在日朝鮮人1世、男性。元西陣織製品の製造業・整理業者。孫 O3氏の調査実習報告書(1996年執筆「O3氏報告書」)を参考。2012年から2014年、O1氏を知る関係者へのインタビューを実施。

- ③ I1氏（1923～）…在日朝鮮人1世、男性。元西陣織製品の製造業・整理業者。2014年、息子I2氏と共にインタビューを実施。
- ④ 玄順任氏（1926～）…在日朝鮮人1世、女性。2009年時は西陣織製品の製造業者。玄順任氏に関する記録<sup>13</sup>を参考。2008年から2009年、本人へのインタビューを実施。
- ⑤ 李玄達氏（1929～2009）…在日朝鮮人1世、男性。元西陣織製品の製造業者。2008年時は販売・流通業者。李玄達氏に関する記録<sup>14</sup>を参考。2008年、本人へのインタビューを実施した。
- ⑥ 金泰成氏（1938～）…在日朝鮮人2世、男性。元西陣織製品の製造業者。本人作成資料<sup>15</sup>を参考。2011年と2015年に本人へのインタビューを実施。
- ⑦ L2氏（1951～）…在日朝鮮人2世、女性。元西陣織工場の労働者。2008年から2014年、本人へのインタビューを実施。

論文末の付表「西陣織産業に従事した7人の記録とインタビュー整理」は、上記7人の生年／性別、出身、故郷での生活、渡日までの経緯、西陣織産業への参入、技術習得、同産業の生産拡大期にとった行動、同産業での位置、工場経営の中で  
の雇用関係、同産業の衰退期にとった行動について整理したものである。

## II. 朝鮮での生活、渡日、そして西陣織

本章では朝鮮人が故郷でどのような生活をしてきたのか、なぜ日本へ渡り京都の西陣織産業で就労するようになるのか、その技術はどのように習得するのか、西陣織産業の盛衰を受けて、どのように対応したのかを考察する。そして西陣織産業と筆者がこれまで研究した京友禅産業との比較を通じ、各産業における在日朝鮮人と日本人との関係を論じる。

### 1. 困窮化する朝鮮農村

本節では朝鮮半島の故郷で朝鮮人は、どのような生活をしてきたのかを見ていく。① C1氏の場合「小作農民の両親に男5人の子供がいるとなると生活は麦めしも食えない様なさまであり、小作人で土地もほとんどなく収穫も少なく春にくさをたくさん獲ってきておかゆにして食べた。五・六才の頃は、もっぱらしば刈りに行かされ、家の手伝いばかりして、親の愚痴ばかりを聞かされた<sup>16</sup>」という。④ 玄順任氏の事例でも「父親（玄鐘厚氏）は、比較的裕福な地主の長男であった。朝鮮総督府は土地調査事業を開始し、朝鮮人の土地を接収した。…（省略）…玄鐘厚氏の実家では田畑の五分の四が接収され、残された土地で生計を立てていたが、残された土地から収穫された農作物も供出を強要された。それに加えて重税

に喘ぎ、税が払えなくなると、警察当局によって拘束され、拷問を受けることがあった。生活が困窮を極める中で、玄鐘厚氏は日本への出稼ぎを決心する<sup>17</sup>」と土地調査事業により玄順任氏一家の生活が貧しくなり、渡日するまでが描かれている。

このように朝鮮人の渡日の背景には、日本の植民地化支配による故郷朝鮮での生活の困窮化という問題があった。京都市調査によれば1935年当時、市内の朝鮮人労働従事者8,154人中「内地」に渡航した理由は朝鮮での生活困難34.1%、求職出稼ぎ31.2%、金儲け14.1%となり、経済的理由で渡日した者が約8割にもなった<sup>18</sup>。彼らの渡日の要因として特に④玄順任氏の事例で詳細に描かれているように、1910年から1918年にかけて、朝鮮では総督府による土地調査事業が行われ土地所有権が明確化される過程で、多くの農民は土地を失い生活が貧窮化する状況下で渡日することとなった。

同様に、O1氏の事例では「農林学校（中学校）を卒業し、木を伐採した後の土砂崩れや水害を防ぐ仕事のある山林組合に就職した。しかし、月給は安いし、こんな平和な田舎では大きくなれないからもっと勉強するか何処かへ行って経済的に成功したいと思うようになった。自分達のような者は、戦争で混乱している時が一旗揚げのチャンスである<sup>19</sup>」と描かれている。O1氏の事例は経済的成功を求め、閉塞した朝鮮農村を脱出し日本へ渡ろうとした典型的な事例であるだろう。

次に朝鮮人が、どのような経路で渡日することになったのだろうか。①C1氏は「こんな情勢では食えないと考え、当時彼の近所から日本へ、いわゆる出稼ぎで働きに行っている人達が行ったので、C1氏は日本上陸を決心した<sup>20</sup>」とし「取り敢えず故郷で聞いた京都という町へ…<sup>21</sup>」という形で京都へ来た。このようにC1氏は同郷の朝鮮人のつてを辿り渡日であった。

また②O1氏は「1939年（昭和14年）、19歳のとき単身で日本へやってきた。最初は東京で就職しようと思い、職業紹介所で一週間ほど仕事を探したが、どこも劣悪な条件であきらめた。ひどい孤独感にも襲われたので、親戚や小学校時代の友達のいる京都へ急いだ<sup>22</sup>」という。1939年当時O1氏の親戚が京都に存在したとしており、O1氏の渡日は血縁関係を頼った渡航であった。同様に⑥金泰成氏の父金日秀氏も1934年に渡日し、京都に住む伯父の家を下宿した<sup>23</sup>。金日秀氏の事例もやはり血縁関係を頼った渡日と考えることができる。

在日朝鮮人1世がどのように渡日したのかを見たとき、①C1氏は同郷の者が京都で成功したという情報を頼って日本へ渡った者であり、②O2氏や⑥金泰成氏の父金日秀氏は親戚のつてを辿り京都へ来た者であった。彼らのこうした渡日形態は、地縁血縁関係を利用した日本への渡航であったといえるだろう。

一方、地縁血縁関係を頼らない渡日の事例も存在した。④玄順任氏の父玄鐘厚氏は、税金が払えないということで警察当局によって拷問を受けた。このとき彼は日本の警察官から「日本に行ったら金儲けができる」という話を聞き、「このままでは家族が全滅する」と思い、1927年に渡日を決心する。単身で日本へ渡った玄鐘厚氏は京都まで辿り着き、土木建築業に就いた。そして1928年、父を追って玄順任氏も1歳8ヶ月のときに母と姉と共に渡日した<sup>24</sup>。④玄順任氏の父玄鐘厚氏の渡日の動機付けには日本の警察官が存在しており、先述の地縁血縁関係を利用した渡日ではなかった。

## 2. 生きるために織る

日本まで来た朝鮮人は、どのように西陣織産業で就労するようになったのだろうか。①C1氏は同郷の在日朝鮮人の紹介で、京都市上京区の日本人経営の「K織業店」で丁稚奉公の労働者として就労した。初任給は月収50銭程であり、丁稚奉公の条件として、一年間は「K織業店」で住みながら工場や経営者宅の掃除や子守、家事の手伝いをした<sup>25</sup>。また④玄順任の姉も西陣織産業へ就労する契機として、日本人西陣織業者の下で奉公人として働いていた。西陣織産業へどのように就労するのかを見た場合、年少者が丁稚奉公として西陣織業者への住み込みながら、就労するというパターンが西陣織産業への一般的な参入経路であった。例えば、ある日本人労働者は1916年に西陣織職人の子として生まれ、小学校三年生の時から10年間織物業者へ丁稚奉公として働き続けた<sup>26</sup>。この日本人と同様に、事例からも日本人経営の織屋での住み込みの丁稚奉公として就労した後、西陣織産業に就労するようになる朝鮮人年少者が多かったと推測できる。

また家族親族の紹介により、西陣織産業に就く事例もある。③I1氏が在日朝鮮人と結婚した姉を頼って京都へ来たとき、姉夫婦宅にはビロード織機があった。I1氏はそこで家事や炊事を手伝う中で、ビロード織や西陣織に触れる機会があったという<sup>27</sup>。⑥金・泰成氏の父金日秀氏も下宿先の伯父の家では西陣織産業の織屋を経営しており、金日秀氏もそこで必然的に働くようになった<sup>28</sup>。これら③I1氏や⑥金日秀氏は、血縁関係を頼って西陣織工場で就労するようになった者である。先の日本人業者での丁稚奉公を契機とする就労の他にも、こうした家族親戚を始めとした朝鮮人同士の仕事の紹介が西陣織産業では一般的にみられたと考えられる。

そして、ここで注目すべきは1930年代から西陣織産業には既に多数の朝鮮人が従事していたということである。京都府学務部社会課の調査によれば1933年当時、上京区内の賃織業（西陣織産業）に傭人として従事する587人中、朝鮮出生者は126人と2割以上を占め、賃織業の世帯主4,937人中、朝鮮出生者は49

人と1%程度存在していた<sup>29</sup>。西陣織産業の戦前の生産拡大期に当たるこの時期、労働力不足を補うために低賃金労働力として朝鮮人が採用されたとみられる。また京都市社会課は朝鮮人の繊維産業での就労に関して、「従って最も低廉なる労働力としてのみ他の代行業と対抗し得而も朝鮮出身者同胞労働は斯かる業者の希望を実現するものとして歓迎され出したといふべきである<sup>30</sup>」と述べており、朝鮮人が業界内で低賃金労働力として重宝されていた様子を知ることができる。事例からも1930年代から西陣織産業に就労する朝鮮人は、相当数存在していたと推測できる。

そして事例から共通的にみられるものとして、職業の選択肢がほとんどない中で朝鮮人は生きるために西陣織産業で就労したということである。象徴的な事例として④玄順任氏は、「西陣織は朝鮮人の目にもきれいに映った…(省略)…腕がたしかなら、朝鮮人でも仕事ももらえる、朝鮮人にとって夢みたいなお仕事です<sup>31</sup>」と語る。彼女のこの語りは西陣織産業に就労する動機付けとして、西陣織製品とこの産業で働くことへの憧れがあったとしつつも、同時に西陣織産業以外に朝鮮人が就労できる職業がなかったという事実を物語る。他産業への就労が非常に制限されていた朝鮮人は、生きるために西陣織産業で就労するようになったと言える。

では朝鮮人は、西陣織に関する技術をどのように習得したのだろうか。①C1氏の場合、「ひたすら織った。C1氏は努力した。…(省略)…そうすると他人より一割以上多めに織れた<sup>32</sup>」と描かれている。同様に④玄順任氏は14歳のときに就労した百万遍の織屋で糸準備工程、製織工程の技術を覚えた<sup>33</sup>。彼女は全工程を習おうと必死になり、その後は夫に西陣織の整経の技術を教えるまでになった<sup>34</sup>。①C1氏④玄順任氏の事例では、西陣織産業参入当初の技術の習得に関して個人の努力が重要であったことが強調されている。

一方、西陣織より比較的習得が容易とされる織物<sup>35</sup>であるピロード織を習得した後に、本格的に西陣織産業へと参入する朝鮮人も存在する。高野昭雄は1920年代から朝鮮人がピロード織に従事するようになったとし、戦前の朝鮮人の就労経験が戦後のピロードブームを始めとする西陣景気を支えたと指摘している<sup>36</sup>。事例でも③I1氏は1931年から3年間、ピロード織業を営む姉夫婦の下で家事や炊事をしながら、ピロード織の技術を覚えた。その後I1氏は西陣織の技術も習得し、西陣織産業へ本格的に参入したという<sup>37</sup>。また1950年代の事例であるが、⑤李玄達氏は「ピロードは他の織物に比べて、一年から一年半で一人前になれた。私は半年で技術を習得した<sup>38</sup>」と語るように、比較的習得しやすいピロード織の技術を習得した後に、西陣織の技術を本格的に学んだという事例もあった。

では、その技術は誰から教わったのだろうか。⑦L2氏の場合、最初は同じ工

場で働く姉に教えてもらった。姉の不在時は工場の他の誰かに教えてもらったという<sup>39</sup>。⑥金泰成氏も「技術は先に参入している者から、日本人、朝鮮人関係なく伝授されることが多かった<sup>40</sup>」と語る。西陣織産業に関わる技術を学習するとき、またそれを他の誰かに教えるとき、日本人と朝鮮人の分け隔てはないと思われる。同様に朝鮮人独自の技術の伝達という事例は、現在のところ確認することができない。

### 3. 西陣織産業の盛衰の中で

西陣織産業は1945年の敗戦直後から1960年代までが、戦後の成長期であった。この時期、在日朝鮮人の経営者や労働者はどのように対応したのだろうか。まず規模の大きい経営者の事例から見ていく。①C1氏は1946年に京都市北区で西陣織製品を生産する「H織業店」を設立する。そこで石油発動機を購入しベルトで織機を動かす技術を発明し、それを日本人や在日朝鮮人の同業者に見学させた。また1950年、C1氏が「H織業店」の利益で「K商事」を創設し、そこで西陣御召、鏡台掛、テーブル掛、カーテン製造卸と流通業を行うまでになる<sup>41</sup>。在日朝鮮人でありながら西陣織産業経営者でもあるC1氏は、在日朝鮮人の文化と西陣織産業の文化という両文化の、「マージナル」な位置に存在していたことになる。そのため同産業の成長期、彼は画期的な発明や合理的な判断をできたのではないだろうか。

西陣織産業の成長期、①C1氏の他にも大きく成功したと語る在日朝鮮人の経営者の「逸話」が見受けられる。②O1氏の場合、「1958年銀座松坂屋に出品した着物が当選し、皇后陛下御成婚時に300反納めることができた。美智子さんにあやかりたいという人々に人気を呼び、着物は品切れ状態が続いた<sup>42</sup>」とし、彼の製品が大きな人気を博したことが描かれている。また③I1氏は1950年から日本人から土地を借り、そこで西陣織工場を創業する。1960年代、彼の工場には53台の織機が存在したとし、一工場でこれだけ多数の織機を所有する工場は「自分の工場ぐらいだった<sup>43</sup>」とI1氏は語る。⑥金泰成氏の父金日秀氏も、同時期に経営規模を大きくした在日朝鮮人経営者の一人である。彼の経営は1945年に購入した織機4台から始まり、1947年に西陣織工場を建設し1950年には第2工場を建設するなど生産規模を次第に拡大させていったという<sup>44</sup>。

また⑤李玄達氏は西陣織工場で就労しながら、1955年から着物製品の流通と販売業を始める。業界では異例であった訪問販売という形式を採用し、同業者を集めて展示会を開催することで着物の売上を伸ばしていった<sup>45</sup>。李玄達氏は着物の販売・流通業者として成功した事例だといえるだろう。以上の①C1氏②O1氏③I1氏⑤李玄達氏⑥金泰成氏のような比較的経営規模の大きな経営者の場合、



彼らの記録や語りから、西陣織産業で経営規模を拡大する、画期的な技術を開発する、また新しい販売手法を確立するなど、西陣織産業で成功したという「逸話」がみられた。

しかし経営規模の小さな経営者や労働者の場合は、同様ではなかった。規模の小さい工場経営者であった④玄順任氏や、西陣織工場を転々としながら労働者として36年間西陣織工場で就労した⑦L2氏からは、先述ように大きく成功したような「逸話」を聞くことはなかった。④玄順任氏は敗戦直後、夫と共に京都で「西陣織でも覚えて一旗あげよう」と整経の機械一式を入手し夫婦で働くが「全然一旗あがらずじまい<sup>46</sup>」であったと描かれている。西陣織産業の最盛期について、⑦L2氏は「よくガチャマンって言ってた時代もあったけどね。私らとは違う世界の話やった」とし、「成功する人は一部のお金持ちのところだけ<sup>47</sup>」という。彼女らの語りからは、西陣織産業で成功する一部の経営者に対する、零細経営者や労働者の冷やかな視線を感じることができる。このように当時、経営規模を拡大できたのは一部の経営者に限定されており、零細な経営者や西陣織工場労働者として就労する者は、当時の仕事を就労し続けるしかなかったと考えられる。西陣織産業で「成功した逸話」を語る者は経営規模の大きい経営者であり、経営規模の小さい工場経営者や工場労働者の事例から、先の経営者のような「逸話」を聞くことはなかった。

1960年代まで同産業は活況を呈するが、日本の服装文化の変化や原材料の高騰等により、同時期からこの産業の成長が難しくなる。西陣織産業の成長停滞期から衰退期にかけて、同産業に従事した朝鮮人はどのように対応したのか。ここでも経営する工場の規模の違いや、本人が経営者か労働者かであるかに留意しながら見ていく。

敗戦直後から1950年代にかけて大きく成功した①C1氏家族であるが、1950年代末から「西陣織に未来はない<sup>48</sup>」といち早く感じ、同産業からの転業を図った。「1958年、C1氏は不動産事業に着手し、農園として使っていた京都市北区の土地に、部屋数35室のアパートを建設。不動産を管理する会社「N商事」を設立し「H織業店の利益のある時期に購入した土地にアパート8件を建設。1959年、分譲住宅の方法で右京区で住宅販売を始めた<sup>49</sup>」という。①C1氏の場合、西陣織産業から不動産事業へ転換した事例であった。

続く②O1氏は、1964年に経営する織工場を「M織物整理工場」と改称し、西陣織最終工程の仕上げ加工業に転向した。O1氏は20年近く仕上げ加工業を続け、後に経営を息子O2氏に任せ引退する。そしてO2氏はこの加工業をパチンコ産業に転業した<sup>50</sup>。同様に③I1氏も1960年代から西陣織産業に限界を感じ、工場の建物と織機を他の西陣織産業者に貸し、自身はパチンコ店やボーリング場経営

などのミュージメント産業へ転換を図った<sup>51</sup>。先行研究で韓載香が指摘するように<sup>52</sup>、本稿でもパチンコ産業へ転業した在日朝鮮人の経営者が② O1氏と③ II氏の事例より確認できた。

また、全くの他業種へ転業した事例もある。⑥金泰成氏は1980年代まで西陣織産業を営むが、この時期から同産業からの転業を模索した。そして1984年、取引関係のあった日本人の同業者から空調設備会社の紹介を受け、空調設備設置の仕事を始めたという<sup>53</sup>。これら① C1氏② O1氏③ II氏⑥金泰成氏の事例は、ある一定の規模を持った経営者であったため西陣織産業から不動産業やパチンコ産業、空調設備の設置など、他産業への転業が可能であったと推測できる。

だが本稿ではそうした転業をした者だけではなく、西陣織産業に従事し続けた在日朝鮮人の姿を確認することができた。小規模な工場経営者④玄順任氏や販売・流通業者⑤李玄達氏は、筆者がインタビューを行った2008年においても現役で西陣織産業に従事していた。また⑦ L2氏も、2001年に西陣織工場を事故による怪我で退職するまで同産業に従事していた。以上のように、西陣織産業の成長停滞期から衰退期にかけ他産業への転出することなく、この産業で就労し続けた在日朝鮮人も存在した。

#### 4. 京友禅産業の蒸・水洗工程との比較

本節では筆者がこれまで研究してきた京友禅産業の蒸・水洗工程の在日朝鮮人と西陣織産業の在日朝鮮人との比較を通じて、各産業における在日朝鮮人と日本人との関係についてを考察する。

京友禅産業の蒸・水洗工程を担う工場を見たとき、経営者・労働者ともに朝鮮人が多数を占めていた。筆者が調査をした2009年、京友禅産業の蒸・水洗工場12工場中9工場が朝鮮人の経営であった。また一事例として扱った蒸・水洗工場では1967年になるまで日本人労働者は就労しておらず、最も労働者が多かった1969年でも労働者20人中、朝鮮人が17人であった<sup>54</sup>。こうした朝鮮人の特定工程の集中の背景として、この蒸・水洗工程の労働環境が肉体的に「きつく・汚く・危険」な3K労働であったため日本人がこの工程に就くのを避け、逆に職業の選択肢の少ない朝鮮人が集中するようになったと考えられてきた<sup>55</sup>。

そのため京友禅産業では、経営者として日本人と在日朝鮮人が競争する機会は少なかったと推測できる。また1970年代まで、工場内で在日朝鮮人が日本人と共に働くということも多くはなかった。それゆえ在日朝鮮人と日本人間で、京友禅の蒸・水洗の技術を教え合うことも少なかったと想像できる。京友禅産業では「日本人は染工場、在日朝鮮人は蒸・水洗工場」というように、産業的「棲みわけ」(segregation) という現象がみられた。

一方、本稿の事例より西陣織産業で産業的「棲みわけ」のような民族間の分業はみられず、日本人と朝鮮人との関係は競争をし合う関係に近かったと考えることができる。経営者であれば① C1氏の製造業者や問屋、② O1氏の整理業者、⑤李玄達氏の流通業者のように業界内での信用や本人の努力、優れたアイデアがあれば、ある程度は成功することができた。零細な経営者や労働者でも、④玄順任氏や⑦ L2氏のように技術と能力、勤勉さがあれば、この業界で労働者として認めもらうことができたと本人らは語る。こうして見たとき、西陣織産業において在日朝鮮人と日本人との関係は、互いに競争し合うものに近かったと推測することができる。

### Ⅲ. 民族的アイデンティティの表出

本章では在日朝鮮人が、西陣織産業で労働する中で持った民族的アイデンティティを見ていく。ここでの在日朝鮮人の民族的アイデンティティとは、日本人の西陣織産業経営者や労働者ではみられない、活動や感情であると考えられる。具体的に、西陣織産業における在日朝鮮人の民族的アイデンティティがどのように現れ民族的な活動となっていくのか、またある在日朝鮮人の事例より民族的アイデンティティがどのように形成されていくのか、そして西陣織産業に携わった在日朝鮮人が民族的な意識を持ちながら同産業で就労することに対して、どのような思いを持ったのか考察する。

#### 1. 故郷への貢献、日本での生活基盤の獲得

本節では在日朝鮮人1世達の活動が、在日2世3世達によってどのように描かれているのか、彼らに関する記録で描かれた事例を中心に見ていく。まず① C1氏は1962年、韓国の絹製品の日本への輸入を計画し、実際「絞り」製品の生産方法を韓国で指導し、絞り製品の生産を行った。そしてこの事業を1960年代前半に拡大させていった。このことで大韓国外務部長官に表彰されC1氏は「祖国再建の為に、役立てようと会社を設立し、今日までがんばってやって来ました<sup>56</sup>」と答えた。またC1氏は韓国の産業復興へ貢献するかたわら、1978年に故郷尚州で農地を購入し農業を始める。その農業で得られた収益で、彼は故郷の尚州に化東中学校に「化東面奨学金」制度を設立し、その理事長に就任するなど教育面でも故郷に積極的に関与したことがC3氏によって描かれている<sup>57</sup>。

② O1氏の事例でも「また故郷に先祖を祭る神社を創設する事もできたという。O1氏のかねてからの願望である「故郷に錦を飾る」という大業は、見事に達せられた<sup>58</sup>」と描かれている。この「故郷の先祖を祭る神社」は、おそらく祖先の

位牌を安置する「祠堂<sup>サダン</sup><sup>59</sup>」を指すものだろう。O3氏の記述から、そうした行動は1世であるO1氏の「故郷に錦を飾る」という思いによるものであり、それは強い「愛郷心」の一形態として現れたと理解できるだろう。この二事例より、在日朝鮮人1世が故郷、この文脈では1960年代から韓国の地域社会に対し、経済的・文化的に貢献しようとするパターンであった。一方、日本において朝鮮人としての民族的アイデンティティを見出し、表出させる事例も存在する。

敗戦直後、西陣織産業内では在日朝鮮人の組合を設立しようという動きがあった。戦前から、朝鮮人は日本人の織物組合に加盟できないという問題を目の当たりにした①C1氏は、「朝鮮人は朝鮮人同士、助け合って行ける様な基盤となるもの<sup>60</sup>」が必要であると考え、1946年12月創設の「朝鮮人西陣織物工業協同組合」の設立に関わる。しかし政治的対立を背景に1950年10月、C1氏は非共産主義者を中心に、朝鮮人西陣織物工業協同組合に非加盟の朝鮮人を集め、「相互着尺織物協同組合」の設立にも関係したという<sup>61</sup>。

また⑥金泰成氏の父金日秀氏の場合、朝鮮人独自の金融機関設立に尽力したというエピソードが残っている。西陣織産業を始める上で、工場の土地と建物、運転資金を合わせて多額の資本投資が必要になるのだが、多数の在日朝鮮人は「民族的差別のために疎外された<sup>62</sup>」とし、戦後しばらく一般の金融機関から融資を受けることが難しかったという<sup>63</sup>。朝鮮人組合理事長の金日秀氏はこの問題を痛感し、1948年に組合として金融機関の設立を決議し京都の商工業者だけでなく日本全国の朝鮮人に呼びかけた。1951年、「同胞社会がこのように分裂化した中で、朝鮮人組合理事長は朝連と民団の壁を超えて、西陣と友禅の他に諸々の商工業者を結集した統一金融機関にまとめあげたのであった<sup>64</sup>」としている。この統一金融機関の設立は京都では固まりつつあったが、東京での政治的対立のために失敗してしまった<sup>65</sup>。

以上の在日朝鮮人2世3世らの記録からは、朝鮮人に対する制度的な制限の中で在日朝鮮人1世がとった朝鮮人独自の組合や、民族金融機関を設立しようという思いと活動が浮かび上がってくる。そして、これらの活動は日本での在日朝鮮人の生活基盤を確立するという部分で通底していたといえる。本節の事例中、在日朝鮮人1世達が行った活動からは、祖国復興のために経済的・文化的に貢献しようという思いと、日本における定住外国人としての生活基盤を獲得しようという二つの方向性が見えてくる。言い換えれば、ここでの彼らの民族的アイデンティティが活動として表出する場所は、彼らの故郷である朝鮮半島と、活動や労働の場となった京都の西陣であったと解することができる。朝鮮近現代史家の梶村秀樹が1945年以降、国境で隔てられながらも、それを超える在日朝鮮人の家族形態や生活実態を「国境をまたぐ生活圏<sup>66</sup>」であると指摘した。本稿でも特に①

C1氏の事例は、「国境をまたぐ生活圏」を実践する典型例であったと言えるだろう。

## 2. 再構成するアイデンティティ

しかし上記の在日朝鮮人1世らとはまた異なる形で、自身の民族的アイデンティティを語る在日朝鮮人2世が存在する。2008年、筆者は初めて⑦ L2氏に出会い、彼女の家族史についてインタビューを行った。朝鮮人の父と日本人の母を持つ在日朝鮮人2世である L2氏は、幼少期に母と、16歳の時に父と死別した。「アボジ（父）は日本人かなって思われるくらい、本当に日本語が上手な人やった。そのせいで私、ハングルを覚えることもできなかったね」と彼女は語る。そして L2氏は父 L1氏が朝鮮でどのような生活をしていたのか、なぜ日本に渡り京都まで来たのか「分からないことだらけ<sup>67</sup>」と答えた。

L2氏の姉は民族学校へ通うのだが、家庭の経済的事情により L2氏は日本の公立小中学校に通うこととなった。姉は民族学校に通っていたのに、L2氏は自身が民族学校に通わせてもらえなかったことに不満を覚えた。しかし当時、父 L1氏が病気がちであったため「アボジに、なんで私は朝鮮学校へ入れてくれへんかったんやって思うことはあっても、どうしても不満は言えへんかった<sup>68</sup>」と語る。1966年に公立中学校を卒業後、L2氏は西陣織産業のある工場で労働者として就労するようになり、何軒かの西陣織工場で労働者として30年近く働いてきた。

L2氏は「(在日朝鮮人) 2世というか、日本人とのダブルという意識がどうしてもあってね」と自身を振り返りながら、母が日本人である L2氏は在日朝鮮人社会の中で「純粋な在日朝鮮人」として生きることへ葛藤を覚えることもあったと語る。「私達の世代はどこの在日の組織に所属しているかだけで、北やら南やら思想のことでバラバラにされてしまうところがあって… (省略) …言葉しゃべれへんっていうのもあるけど、そういう運動の中に没頭する人間には、どうしてもなれへんて思って<sup>69</sup>」と回想するように、政治的イデオロギー対立に翻弄されることを嫌った L2氏にとって、在日朝鮮人の各種組織との関わりは多くはなかった。

彼女は西陣織工場で働く中で、在日朝鮮人としての民族的な感情と相似した、自身が「日本人ではない」という感情が、「ふっと表れることがあった」と語る。「たまに工場の中で、些細なことかもしれんけど、「あんた、日本人でしょ」とか、「日本人やったら、それくらい」みたいな話題になってん。で、その時「私 (L2氏は) 日本人ちゃうねん」って、そこで大きく言って、それで周りを驚かせたりもしたわ<sup>70</sup>」と彼女は回想する。労働者が「日本人である」ことを前提として捉えられることが多い西陣織工場の中で、L2氏は「日本人」として彼女自身が扱われることに違和感を持ったという。戦前戦後を通して、西陣織産業で多数の在日朝鮮

人が携わってきた歴史があるにもかかわらず、同じ工場で働く日本人がこの歴史を全く知らないのか、あるいは知らないふりをしているのか、L2氏は正直分りかねるという。しかし彼女が持った違和感というのは、そうした日本人と同じ「日本人」として、L2氏自身が同一視されていくことへの抵抗に近いものでもあったとも語る<sup>71</sup>。

2001年、L2氏は工場で作業中に事故に遭い、その怪我によって西陣織産業を引退した。その頃から時間的な余裕ができたL2氏は、在日朝鮮人に関する歴史を勉強し、朝鮮語の勉強会にも参加するようになった。また2010年から彼女の父であるL1氏が朝鮮でどのように生活し、なぜ日本へ渡って来たのかも独自で調べるようになった。そしてL1氏の故郷である尚州へ訪れ、親戚にも会うことができたという。2013年に筆者が再びインタビューを行ったとき、彼女は自身の「親戚探し」は簡単でなかったとしつつも、彼女が分からなかった父L1氏に対する思いについて「まゝ決着できたのかな」とし、これらの活動を通じ彼女は自身が朝鮮人の父と日本人の母を持つ、「在日朝鮮人2世」であると思えるようになったとも語る<sup>72</sup>。

L2氏が在日朝鮮人としての民族的アイデンティティを持つにいたる出発点は、西陣織産業で就労する中で、彼女が「日本人扱い」を受けたところにあった。西陣織産業からの引退後、特に2008年から2014年にかけて、筆者はL2氏とインタビューを重ねる中で、彼女なりの民族的アイデンティティを探る活動を通じ、L2氏が民族的アイデンティティを先の1世達とは異なる「在日朝鮮人2世」として、具体的に再構成させる一場面をみることができたと考える。

### 3. 労働者のアイデンティティと民族アイデンティティの交錯

それでは西陣織産業に携わった在日朝鮮人が民族的な意識を持ちながら、この産業で就労することに対して、どのような思いを持ったのだろうか。ここでは2000年代まで、この産業に従事していた3人の事例を扱う。李洙任が④玄順任氏と⑤李玄達氏に西陣織産業に対する思いを聞いた事例を再考察するとともに、筆者がインタビュー調査をした⑦L2氏の事例を取り上げる。

2008年に出版された『在日一世の記憶』中で、④玄順任氏は戦後に西陣織産業で求職しようとしたとき日本人の持つ朝鮮人への偏見を体験したというエピソードが紹介されている。彼女が賃織り募集の張り紙を見て、ある西陣織工場を訪ねたとき「良い人が来てくれた。チョーセン（チョーセン）が来たらどうしようと夜も寝られなかった<sup>73</sup>」と言われた。このエピソードで描かれるように、西陣織産業でも一部の日本人との関係の中で、朝鮮人に対する偏見や日常的差別が存在していたと言えよう。

しかしながら玄順任氏がこうした偏見を体験しても、西陣織産業と彼女の労働に対して「家族を養ってきた自分の仕事には誇りを感じています<sup>74</sup>」と語る。この語りからは、一部で朝鮮人に対する日本人の偏見が存在する西陣織産業ではあるが、彼女の労働によって家族が生活できたことに、強い自負心を持っていたと読み解くことができる。そして一生を通して西陣織を織り続けた玄順任氏にとって、西陣織産業は彼女の「生」そのものでもあった。また職業選択が大幅に制限されていた在日朝鮮人であっても、西陣織の仕事に就き生活をしてきた現実を彼女は見たであろう。こうした文脈から玄順任氏は「西陣は朝鮮人を差別しなかった<sup>75</sup>」とし、西陣織産業とそこでの労働を肯定的に評価するのではないだろうか。

続いての事例として、李洙任の「着物を愛していますか」という問いに対する⑤李玄達氏の回答を取り上げてみたい。李玄達氏は「大切な商品とは思いますが、私たちは所詮朝鮮人です。自分の妻には、着物を着せなかった。朝鮮人が着物を着ても似合わないと感じ切っていた。作法もやはり朝鮮人とは異なりますし、あくまでも着物販売は生活のための手段です<sup>76</sup>」と語る。彼の回答からは、着物の製造や販売は生活するための手段であり、自身が「在日朝鮮人である」という民族的な感情とを明確に区別して、西陣織に携わって来たことを感じるができる。

また「どのような思考でもって、朝鮮人が日本人のために着物を作り販売したのか」という李洙任の質問に対しても、李玄達氏は「伝統を担うとか、守るとかそのような考えはまったくありません。なにしろ、人間らしく行きたかったです。日本人のように人間らしく生きたかった。それだけです<sup>77</sup>」と答える。これら李洙任との応答の中で李玄達氏が強調したことは、この産業で60年近く働いた彼が持った思いは、西陣織は伝統工芸品ではあるが、そうした「伝統」に対する思い以上に、「人間らしく生きる」ために必死で働いてきたという部分であったと言えるのではないか。

上記の二人とは異なる形で、西陣織産業への思いについて語る者もいる。2008年、筆者が⑦L2氏に西陣織での労働と彼女の家族史を聞く中で、以下のような語りを聞くことができた。L2氏は「自分の織っているのは、それはそれできらびやかな帯やけど、自分の子ども達にそんな綺麗な着物を買ってあげたいとは思わない。それは着物がうんと高いから。西陣で働く人なら皆、同じやと思う。でもね、それでも上手に織れたら、やっぱり嬉しいですね<sup>78</sup>」と語る。彼女の語りの最後の一文から、西陣織の技術を学び着物を製造する中で形成されていく、いわゆる西陣織の「職人」としての自負心と、完成された製品に対する愛着が伺える。それらは労働を通して専門家になっていく部分と、技術を習得することに喜

びを覚えるという部分で、労働者としてのアイデンティティの一部を成すものであるだろう。

しかし、それでいてL2氏は完成された帯や着物などの製品が高額なゆえに、彼女を含めた全労働者が着物製品を「気軽に買うことができる商品ではない<sup>79)</sup>」と考える現実があるという。この彼女の語りから、西陣織産業の労働者は自身の作った着物を気軽に着ることはできないという、労働の問題が浮かび上がってくる。そして、それは在日朝鮮人特有の問題ではなく、西陣織工場で就労する日本人労働者にも共通的な問題であったことを示唆している。ただ、この問題を日本人以上に意識することになる労働者は、外国人でありながら西陣織産業に携わり続けた在日朝鮮人であった可能性もある。

現段階において筆者の力不足もあり、西陣織産業で就労することに対してどのような思いを持ったのか、一言で説明できない。強いて言うならば、西陣織産業に携わる在日朝鮮人は、自身の働く産業に対して各個人が多様な感情を抱いていた。ある者はこの産業で働くことと獲得した経験に対し誇りを持ち、ある者は「人間らしく生きる」ために必死に働いてきたと語る。また西陣織産業での労働を、素直に評価することができないと考える者もいた。そうした多様な違いの中で共通的に浮かび上がるものは、彼らが生きるために西陣織産業で必死に働いてきたという認識とともに、そこでの労働を通して生まれる製品への愛着や、習得する技術への自負心や喜びなどの、労働者としてのアイデンティティではないだろうか。

#### IV. 終わりに

ここでは本稿で見てきた事例を整理する。事例より渡日の理由として、植民地朝鮮の故郷での生活の困窮化という問題を挙げる者が多かった。また故郷での生活苦と同時に、内地での経済的成功を求めて日本へ渡航する者も存在した。そして西陣織産業へ参入する際、職業の選択肢が大幅に制限されていた在日朝鮮人は生きるため、この産業に就労することになった。本稿で調査対象となった在日朝鮮人では、朝鮮人を介して西陣織産業で就労するようになった者が多かった。しかし事例よりも早く西陣織産業に従事した朝鮮人、つまり先行研究で河明生が指摘した「自己申し込み」による先駆的就労者<sup>80)</sup>の就労経路が、今後の課題の一つとなるだろう。

西陣織産業に関する技術の習得について、在日朝鮮人はやはり生きるために技術を必死に獲得していった。この技術を習得する際、日本人と在日朝鮮人との間で大きな差異はみられなかった。1950年代から60年代半ばまでの戦後の西陣織



産業の成長期、規模の大きい経営者が「大きく成功した」という「逸話」が、インタビューや彼らの息子や孫が作成した資料からみられた。しかし零細な経営者や労働者の場合、そうした「成功例」と考えられる記述や語りを得ることはできなかった。

1960年中盤以降の西陣織産業の成長停滞期から衰退期にかけて、経営規模の大きい在日朝鮮人経営者の中には不動産産業やパチンコ産業、空調設備の設置業などの他産業へ転業する者が存在した。一方、規模の小さい経営者や労働者の場合、筆者のインタビュー当時において、彼らは西陣織産業に従事する者や、同産業から引退後も他産業で就労することのない者であった。また京友禅産業の蒸・水洗工程との比較した場合、京友禅産業では日本人と朝鮮人が製造工程別に分業する産業的「棲みわけ」という現象がみられた。対照的に、西陣織産業では「棲みわけ」の現象はみられず、在日朝鮮人と日本人との関係は互いに競争し合うものに近かったと考えられる。

そして西陣織産業の中で在日朝鮮人としての民族的アイデンティティは、各自様々な形で表出する。在日朝鮮人1世の事例より祖国建設のために故郷の経済や社会再建に尽力する者が存在すると同時に、西陣織産業での在日朝鮮人の組合や民族金融機関の創立を試みるなど、日本での生活基盤の獲得のために尽力するという活動も存在した。一方、ある在日朝鮮人2世の女性は、西陣織産業で就労する中で自身が「日本人扱い」を受けたことに違和感を覚えたと言語する。この違和感が、彼女が「日本人」ではなく「在日朝鮮人2世」として、民族的アイデンティティを再構成する出発点にもなっていたと解することができる。

最後に在日朝鮮人のもつ西陣織産業に対する意識について、本稿では考察を試みた。西陣織産業の中で、彼らは自身の働くこの産業に対して各個人が多様な感情を持っていた。ある者はこの産業で働くことと獲得した経験に対し誇りを持ち、ある者は「人間らしく生きる」ために必死に働いてきたと言語する。これら違いの中で共通的にみえてくるものは、彼らが生きるために西陣織産業で必死に働いてきたという思いと、労働を通して生まれる製品への愛着や、習得する技術への自負などの、労働者としてのアイデンティティではなかろうか。

本稿は、西陣織産業に携わった在日朝鮮人7人の事例を扱ったのみである。西陣織産業に就労した在日朝鮮人の全体を論じるためにも、調査対象者を増やす必要がある。また本稿は事例研究であり、それら事例の前提となる時代背景を知るために新聞記事や統計資料の分析をする必要がある。これらは今後の筆者の課題としたい。

付表：西陣織産業に従事した7人の記録とインタビュー整理

	① C1氏	② O1氏	③ I1氏
生年／性別	1911年／男性 在日朝鮮人1世	1919年／男性 在日朝鮮人1世	1923年／男性 在日朝鮮人1世
出身	慶尚北道尚州郡	慶尚北道尚州郡	慶尚北道大邱府
故郷での生活	両親は小作農。 尚州居住の日本人の無煙炭採掘業者宅で住み込みで働き、日本語能力習得。	農林学校を卒業後、山林組合で就労。	父と兄はI1氏が幼い頃に他界。母と姉と生活。 母の再婚後は姉と生活。
渡日までの経緯	同じ故郷から日本へ働きに行った者が多かった。そうした先に渡日した同郷の者を頼って、1928年にC1氏は日本へ渡る。	山林組合での月給に対する不満と、故郷を去って、成功を納めたいという思いで、1939年に日本へ渡る。	姉が京都に在留する在日朝鮮人と結婚。 1931年にI1氏は姉とともに大邱から京都へ移住。
西陣織産業への参入	1928年、在日朝鮮人の紹介で、西陣織工場に住み込みの機織り職工として1年間就労。以降は労働者として就労。	友禅染産業を経営する親戚の紹介でメリヤス工場で就労。以降、職場を変えながら、労働者として就労。	義兄がT氏が西陣織の織機を所有しており、I1氏はそこで丁稚奉公として家事や炊事などを手伝う。
西陣織産業の技術習得に関して	「ひたすら」織ることで、技術を習得する。		西陣織産業を営む義兄の下で3年間丁稚奉公をしながら、ピロード織の技術を学ぶ。 その後、西陣織の技術も本格的に習得する。
西陣織産業の生産拡大期にとった行動	1946年、土地を購入し、西陣織工場「H織店」を創業。1950年「K 商社」を創業し、西陣織製品の卸売業や流通業を開始。	1943年に日本人が放棄した西陣織工場の経営権を購入し「F 織業店」を創業。 1958年、OB氏が大手百貨店に出品した着物が当選。OB氏の製造する着物は人気になる。	日本人から土地を借り、そこで西陣織工場を創業。 最多時には53台の織機が存在した。
西陣織産業での位置	西陣織製品の製造業・卸売・流通業。	西陣織製品の製造業、1964年からは最終工程の整理業。	西陣織製品の製造業・整理業。
工場経営の中での労働者の雇用関係	C1氏宅が職業斡旋所となり、日本人・在日朝鮮人の区別なく、雇用。	主に日本人女性を雇用。	工場では働く者のほとんどが日本人女性であった。
西陣織産業の衰退期にとった行動	西陣織産業には未来がないと予測し、日本での事業として不動産業を行う。	1980年代からO1氏の息子がパチンコ店を経営。1994年、息子の他界後、O1氏がパチンコ店の経営を引き継ぐ。	1963年に大きな不渡りを受け、1970年代からパチンコ店とボーリング場の経営を開始。1985年まで出機を行う。

④玄順任氏	⑤李玄達氏	⑥金泰成氏	⑦L2氏
1926年／女性	1929年／男性	1938年／男性	1951年／女性
在日朝鮮人1世	在日朝鮮人1世	在日朝鮮人2世	在日朝鮮人2世
忠清南道燕岐郡	黄海道	京都生まれ (父金日秀氏は慶尚北道義城郡、母は醴泉郡出身)	京都生まれ (父L1氏は慶尚北道尚州郡出身、母は日本人)
父玄鐘厚氏は比較的裕福な地主の長男であったが、土地調査事業によって一家が没落。		「元々は貧しい家庭というわけではない」「由緒正しい一族だったのではないか」	1902年生まれ父L1氏氏について知らない部分が多いが、おそらく「すごく貧しかったと思う」(1966年、L1氏他界)
1927年、父玄鐘厚氏が日本へ渡る。 1928年、父を追って母と姉とともに玄順任氏も日本へ渡る。	1950年、朝鮮戦争勃発による徴兵を避け、渡日。京都に住む親戚を頼り、李玄達氏も京都へ移住。	1934年に父金日秀氏が渡日。京都では親戚宅で下宿生活。	1925年L1氏は渡日。1930年に日本人男性と結婚。
姉が西陣織工場で丁稚奉公をしており、玄順任氏は西陣織に興味を持つようになる。 1940年、朝鮮人の紹介によって西陣織工場で労働者として就労する。	親戚が西陣織工場経営者であり、1950年に李玄達氏もこの工場で丁稚奉公として就労。	下宿先の親戚が西陣織工場を経営。金日秀氏もそこで就労し、1939年に織機を借り、独立。 金泰成氏は、大学院卒業後1962年から西陣織産業の家業を継ぐ。	L2氏は西陣織工場で就労していた。姉も家庭を支えるために西陣織工場で就労。1965年15才で、L2氏も姉の働く在日朝鮮人経営の工場で働く。
14歳時に就労していた工場で技術を学ぶ。全工程の技術を学ぼうとする。	半年間、ピロード工場で丁稚奉公をしながら、ピロード織の技術を学ぶ。その後西陣織の技術も本格的に習得。 より専門的な技術は京都工芸繊維大学で学ぶ。	技術は先にそこで働いていた者から学ぶ。	初めは同じ工場で就労する姉から技術を学ぶ。その後は日本人／朝鮮人の分け隔てなく技術を学び、教え合う。
1945年直後、夫婦で西陣織工場を創業。	工場で就労しながら、1955年から着物製品の流通と販売業を開始。	1945年にピロード織機4台を購入。 1947年に西陣織工場を建設。1950年には第二工場を建設し、生産規模を拡大。	(L2氏が就労する1960年代にはすでに西陣織産業の先行きが陰しいと言われていた。) 「成功する人は一部分」
西陣織製品の製造業。	西陣織製品の販売・流通業(悉皆屋)。	西陣織製品の製造業者。	工場労働者。 出産などを理由に西陣織工場を4回転職。
		主に日本人を雇用。	工場には日本人・在日朝鮮人ともに存在していた。「日本人経営の工場、在日経営の工場とで違いは無いように思う。」
2008年まで織屋として就労するが、病気により引退。	2009年に亡くなるまで、西陣織製品の流通・販売業者として就労。	1984年に西陣織糸業者の紹介で空調設備業に転換。	2001年に作業中の事故により、西陣織工場から退職。

## 注

- 1 本稿では朝鮮半島に民族的ルーツを持ちながら日本に居住する人々の総称として「在日朝鮮人」という名称を用いる。その範疇には韓国籍／朝鮮籍の者、日本国籍者も含まれるものとする。
- 2 飯沼二郎『見えない人々 在日朝鮮人』（日本基督教団出版局 1973）9.
- 3 河明生『韓人日本移民社会経済史 戦前編』（明石書店 1996）79.
- 4 高野昭雄「京都の伝統産業、西陣織に従事した朝鮮人労働者（1）」『コリアンコミュニティ研究』vol.3（こりあんコミュニティ研究会 2012）74-76.
- 5 韓載香『「在日企業」の産業経済史 その社会的基盤とダイナミズム』（名古屋大学出版会 2010）.
- 6 李洙任「京都西陣と朝鮮人移民」『在日コリアンの経済活動 一移住労働者、起業家の過去・現在・未来』（不二出版 2012）36-60、「京都の伝統産業に携わった朝鮮人移民の労働観」同書 61-80.
- 7 高野昭雄「戦後一九五〇年代の京都市西陣地区における韓国・朝鮮人」『社会科学』第44巻44号（同志社大学人文科学研究所 2015）1-33.
- 8 本稿では「語り」の口調を生かすために、筆者が本人へ直接インタビューした記述は「ゴチック体」で表記した。
- 9 西陣織工業組 HP「西陣の歴史」（<http://www.nishijin.or.jp/history/history01.html>（アクセス 2015年9月26日））.
- 10 中江克己「西陣織」『日本の伝統染織辞典』（東京堂出版 2013）82, 満足満点旅行企画萬転社 HP「西陣織の工程」頁（<http://kyoto-tabi.jp/nishijin/index.php?%E8%A5%BF%E9%99%A3%E7%B9%94%E3%81%AE%E5%B7%A5%E7%A8%8B>（アクセス 2015年8月30日））.
- 11 原田伴彦「日本経済の動き」『組合史 一西陣織物工業組合二十年の歩み（昭和二十六年～昭和四十六年）』（西陣織物工業組合 1972）21-22.
- 12 京都市伝統産業活性化検討委員会『伝統産業の未来を切り拓くために - 京都市伝統産業活性化委員会提言』（京都市産業観光局商工課伝統産業課 2005）9.
- 13 小熊英二・姜尚中編『在日一世の記憶』（集英社 2008）389～403, 李洙任 同書 36～60.
- 14 李洙任 同書 61-80.
- 15 金泰成「「西陣織」と「友禅染」業の韓国・朝鮮人業者」（第181新島会資料 2007.11）
- 16 C3氏 卒業論文 6-7.
- 17 李洙任 同書 43.
- 18 京都市社会課『市内在住朝鮮出身者に関する調査』第41号（京都市社会課 1937年），朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』第3巻，三一書房 1976）1147-1148.
- 19 O3氏 報告書10.
- 20 C3氏 同書 18-19.
- 21 C3氏 同書 21.
- 22 O3氏 同書 10.
- 23 金泰成氏へのインタビュー（2011年1月29日 京都市上京区 喫茶店にて実施）.
- 24 李洙任 同書 44.
- 25 C3氏 同書 21-25.
- 26 中谷寿志「小林夫妻の西陣織人生」『日本の染織：西陣織・世界に誇る美術織物』第11巻（泰流社 1976）83-86.
- 27 I1氏へのインタビュー（2014年6月5日 I1氏宅にて実施）.
- 28 金泰成氏へのインタビュー（2011年1月29日 京都市上京区 喫茶店にて実施）.
- 29 京都府学務部社会課「第二部 調査統計」『西陣賃織業者に関する調査』（京都府学務部社

- 会課 1934) 6-13.
- 30 京都市社会課 同書 1184.
- 31 李洙任 同書 48.
- 32 C3氏 同書 22.
- 33 李洙任 同書 51
- 34 小熊・姜尚中 同書 398.
- 35 高野昭雄「京都の伝統産業、西陣織に従事した朝鮮人労働者(3)」『コリアンコミュニティ研究』vol.5(こりあんコミュニティ研究会 2014) 83.
- 36 高野昭雄 同書 83-84,90.
- 37 I1氏へのインタビュー(2014年6月5日 I1氏宅にて実施)。
- 38 李洙任 同書 73.
- 39 L2氏へのインタビュー(2008年10月17日 京都市北区 喫茶店にて実施)。
- 40 金泰成氏へのインタビュー(2011年1月29日 京都市上京区 喫茶店にて実施)。
- 41 C3氏 同書 31-34.
- 42 O3氏 同書 12.
- 43 I1氏へのインタビュー(2014年6月5日 I1氏宅にて実施)。
- 44 金泰成氏へのインタビュー(2011年1月29日 京都市上京区 喫茶店にて実施)。
- 45 李洙任 同書 76.
- 46 小熊・姜尚中 同書 398.
- 47 L2氏へのインタビュー(2012年12月27日 L2氏宅にて実施)。
- 48 C2氏へのインタビュー(2013年9月17日 C3氏宅にて実施)。
- 49 C3氏 同書 43-49.
- 50 O3氏 同書 12.
- 51 I1氏へのインタビュー(2014年6月5日 I1氏宅にて実施)。
- 52 韓載香 同書 101.
- 53 金泰成氏へのインタビュー(2015年5月8日 同志社大学にて実施)
- 54 拙稿「戦後京友禅産業における朝鮮人労働者」『朝鮮史研究会論文集』No.52(緑陰書房 2014) 190.
- 55 拙稿 同書 190.
- 56 C3氏 同書 68-69.
- 57 C3氏 同書 75.
- 58 O3氏 同書報告書 13.
- 59 伊藤亜人ほか監修『朝鮮を知る時点』(平凡社 2000) 188.
- 60 C3氏 同書 32.
- 61 C3氏 同書 32-33.
- 62 金泰成 同書 40-41.
- 63 金泰成 同書 40-41, 李洙任 同書 74.
- 64 金泰成 同書 41.
- 65 金泰成 同書 41.
- 66 梶村秀樹「定住外国人としての在日朝鮮人」(梶村秀樹著作集刊行委員会・編集委員会編 1985)『梶村秀樹著作集 第6巻 在日朝鮮人論』(明石書店 1993) 18-19.
- 67 L2氏へのインタビュー(2008年10月17日 京都市北区 喫茶店にて実施)。
- 68 L2氏へのインタビュー(2008年10月17日 京都市北区 喫茶店にて実施)。
- 69 L2氏へのインタビュー(2008年10月17日 京都市北区 喫茶店にて実施)。
- 70 L2氏へのインタビュー(2008年10月17日 京都市北区 喫茶店にて実施)。
- 71 L2氏へのインタビュー(2010年12月30日 L2氏宅にて実施)。
- 72 L2氏へのインタビュー(2013年12月29日 L2氏宅にて実施)。

## 論文

- 73 小熊・姜尚中 同書 401.
- 74 李洙任 同書 48.
- 75 李洙任 同書 55.
- 76 李洙任 同書 76～77.
- 77 李洙任 同書 77.
- 78 L2氏へのインタビュー（2008年10月17日 京都市北区 喫茶店にて実施）.
- 79 L2氏へのインタビュー（2008年10月17日 京都市北区 喫茶店にて実施）.
- 80 河明生 同書 79.

**Abstract**

# Korean Weavers in the Nishizin Weaving Industry

– A focus on their labors and ethnic identities

YASUDA Masashi

This paper discusses the Korean weaver's labors and their ethnic identities in Nishizin industry, as obtained from their interviews and through their existing documents.

This case study has revealed that Koreans came to Japan, driven by their poverty in their homeland. According to one of the Koreans, he came to Suzerain state-Japan to succeed economically.

Those of them with no choices for a particular career, as well as who wanted to live in Kyoto, Japan entered in Nishizin weaving industry. They managed to enter in their job in this industry through the meditation either by their Korean acquaintances or by someone from their family relations.

To ensure their survival in Japan, they worked hard and they were desperate to learn all the techniques about the industry. This study has found that the techniques learned by the Koreans and Japanese during that time were hardly different from each other. In other words, it indicates that there were no visible segregations between Koreans and Japanese, and that Korean workers were competing equally in the industry alongside the local Japanese.

In the time between 1950's to 60's which is called 'the growing of Nishizin weaving industry', some Koreans said that they had big successes in the industry, and they had owned large-scale factories. However, in the cases of small-scale owners and workers who worked in some factories in this study, it was not possible to obtain a clear description and episodes of such large scale successes.

With the decline in the industry, from 1960's, many large-scale Korean business owners had shifted their capitals into the real estate business or pachinko business. However, such as some small-scale owners and workers, were not able to change their profession during that period.

In the meantime, a variety of Korean ethnic identities appeared in the field of Nishizin. Koreans who were born in the Korean peninsula had tried to contribute to their homeland, for the reconstruction of Korean economy and society. Meanwhile, they were making efforts to establish their ethnic-labors union, and ethnic financial institution for gaining their ethnic-local infrastructure in Japan. They were also trying to establish their ethnic identity in Japan and Korea. One such example was found from one of the Korean woman who had undergone through discomforts when she was treated as Japanese, although she was born in Japan. That incident inspired her to re-establish own ethnic identity. According to her, 'I am not Japanese, but Korean who has born in Japan'.

In the end, Koreans also have variety of opinions about Nishizin weaving industry where they have worked. According to one woman, she was proud of her working in the industry to be able to work. However, the opinion of another man was that he had accepted his working in Nishizin as a means of living. With these differences, they commonly worked in the industry for their survival having Nishizin weaver's identities.